



「部落差別」は、いかにしてはじまったのか なぜ私たちは、いまもそれを克服できずにいるのか？

かつて日本には穢多・非人などと呼ばれる賤民が存在した。1871年(明治4年)の「解放令」によって賤民身分が廃止されて以降、かれらが集団的に住んでいた地域は「部落」と呼ばれるようになり、差別構造は残存した。現在、法律や制度のうえで「部落」や「部落民」というものは存在しない。しかし、いまなお少なからぬ日本人が根強い差別意識を抱えている。なぜ、ありえないはずのものが、ありつづけるのか？ この差別は、いかにしてはじまったのか？ 本作は、その起源と変遷から近年の「鳥取ループ裁判」まで、堆積した差別の歴史と複雑に絡み合ったコンテクストを多彩なアプローチでときほぐし、見えづらい差別の構造を鮮やかに描きだす。

監督は、屠場^{とじよう}とそこで働く人々を写した『にくのひと』(2007年)が各地で上映され好評を博すも、劇場公開を断念せざるをえなかった経歴を持つ満若勇咲。あれから十数年、プロデューサーに「なぜ君は総理大臣になれないのか」「香川1区」の大島新、音楽に世界を舞台につづけるMONOを迎え、文字通り〈空前絶後〉のドキュメンタリー映画をつくりあげた。

被差別部落は、なぜ残ったのか。中世から現代に至るまでの共同体の歴史をたどりつつ、さまざまな立場の人びとが、自分と部落を語った傑作ドキュメンタリー。

角岡伸彦 フリーライター

具体性がないまま膨らみ、実態を確認せずに強い拒否反応だけが生まれる。それは、今、この社会のあちこちで起きていることではないか。歴史を知ると、強烈な問いが現在の自分に向けられる。

武田砂鉄 ライター

「私のはなし
部落のはなし」の話

2/20
刊行!

満若勇咲 著 | 中央公論新社 刊 | 1980円(税込)
牛の解体工程を撮った『にくのひと』の劇場公開が決まるも、抗議を受け、出演者との関係が崩れて封印。失意の日々の後、部落問題をテーマに再び取材を始め、本作が上映されるまでを綴る。

「私のはなし
部落のはなし」
の話を
満若勇咲

部落問題はタブーだ。なぜか認めない。そこが問題で、この問題にどう向き合うかは重要なポイントになる。今回のテーマを語ってもらい、タブーは、それをいひつづける人々によって守られていく。――角岡伸彦
文化庁芸術祭文芸部門大賞
文化庁芸術祭文芸部門大賞

* 本編3時間25分(途中休憩あり)

@buraku_hanashi fb.com/buraku.hanashi buraku-hanashi.jp

主催 NPO法人湖北じんけんネットワーク・長浜市 各参加費：500円
試写会 「私のはなし 部落のはなし」 2023年9月10日(日)13:30~17:15 さざなみタウン多目的ホール
学習会 講師：満若 勇咲 監督 2023年9月17日(日)14:00~16:00 さざなみタウン多目的ホール
問合先 NPO法人湖北じんけんネットワーク 田邊九二彦 090-5640-9937 / 明定義人 090-2597-7898